海外異聞　三

太政官文庫
和書
門
七八六二號
九九函
一架
三三冊

内閣文庫
和
書
類
七八六二號
三三冊
一八五函
九架

内閣文庫
番號 和 7862
冊數 33（5）
函號 185 133

国立公文書館
National Archives of Japan

海外異聞巻之三

目録

一天竺徳兵衛物語

一薩州之水主両山之内大漢一艘ニ漂流之事

口書共

教部省文庫
日本政府圖書
圖書局文庫
国立公文書館 National Archives of Japan

海外異聞巻之二

天竺徳兵衛物語

日本政府図書

図書局文庫

播州高砂の住人某なるもの天竺徳兵衛と申は
子細は往古日本より天竺への商船 御免之節は
京都角倉並ニ末吉孫左衛門平野藤次郎末次平蔵
かこや店之舟に乗り天竺へ渡りしか右徳兵衛儀も
角倉並ニ末吉商船頭前橋清兵衛と申もの雇ニ而
十五才の時寛永十癸酉年十月十六日ニ肥前国長
崎福田ニ出船致し翌年甲戌年三月二日ニ天竺

中がきしの国乾硫川と云ところに而遠江船往は
去ヶ年遠州荒浜三年目に漂申四月二日に乾硫川へ
便船致候同年八月十日に長崎へ着仕候今年
宝永四年去々年迄八拾九歳に成申候
利發にて宗心と申す大坂上博労町に罷在候日本
より天竺川南不くしき地獄かはりつゝのこ在候三四月
北より六七月迄かく漂浦は唐土日本の裏より
海川くろ中き八九月分ゆくる二三月迄上る按針河へ
川以支故一日の間に二三度宛水を汲申候中は中まて

の国周囲千里但し紀分道のり二千里まで構渡へ
三千里在之候は此国よりは絹織物多く商物
米が中には此船は都より大分ゆかれ所とて候某の
今東より家焼失にては荒東より居の所も焼死之
内ちは其中は由角宮臣市成商船長サ弐拾間横巾
九間の船に人数三百八拾七人乗渡海仕候其後天竺
へ渡り申時はかろくやすしまでし申人の唐船に
便船いたし渡り申候海上いつしまで申年寄ヶ年体
十九歳にて渡り申候とは生月十四日に長崎へ着

船仕つくる二月十八日出て国を出船にして翌年
六月廿九日日本へ渡国致しは長崎口分九拾六里東
東の方へ道り世話罷通り是分も一六百五拾里
道り呂宋の国は出の長サ七百五拾里は出の都合
十三之里沖の方にて乍ら北風へしと申渡二所位りは
方角は琉球国の東福列島の方に向かて中は
道より六百五拾里西の方手道り入候ヿ也入口
天川と申深サ九百外九十尋程之有大河へ續れ由
此所迄は日本の北より小斗の星を目当に志く候

右之通りて方角を何は道り中は小斗の星見合
申候も東方大ぐる事ばかり見ゆし申候早武り三百里
何は道り中は天川内三百里も道り是見ての
島と申所にて候其所も東の都の流川にて候
道より三百里西へ道りかくしちらんケ嶽と申所道
より西にて候大山にて候其所達磨寺の跡
也の地迄是より東へ四百里道りちらん嶽の
何と申所に候是より東へ四百里道りかへ
其處何ほと之へば世にめしと申渡其是より式

百里あまりありて中天竺なるむの本路とて中路有
是より八百里ゆけば二ケ所ありけれバまうその國に
入口流砂川の川口也是迄長路より二千百里餘
也流砂但是より六千余里として日本の國
凡六百三拾里餘に當り中は流砂川を志るべ
國とあるべき國とて流るまし川口より三里川上に
是へていやまき城有けれ都よりも日本の物を取め
まふの都王城へ則あまた家にて政を取行はる是よ
中は右なる國をへていやの城まで山川なとおしあへと

中伊勢のふしき佐はなき人ぬきにて中佐の由目おほ
ふしきたる事の佐の也はなかりかへしとて人有ぬ
伊勢國山田の御師のよ代ふしき國をおさめ
中は伊勢まふしき日本の地まていさゝ流る事
有て不思議に我長路いぬ名高く是し折ふし
志るし國の出船あり是つ船に便り船にて志るし
國へ渡り出ての不思ふしき所への東海に乗能
主人此元は出ての名年ふなりと是よ後は志るし
一國の大ねにおゐて中は由目おほえしかし山田に住居

とも申は後鳥羽天皇にてはばおかしまし候へども申は悪しくて
借は桐氏去申なんまんかし先十いろ蝦か帝王の
御帯をと勅申由右まへてハいやゐ弐拾七星川上七
かいそうにと成はりける飯は昔より立海と文禄年
来今の家の由は家より流彼川の浦にていやたび
と申寺何りも当は建長寺の御墦源の由志や
む国寺一の長寿也まうて国のていやたい合七星を
て長さ弐拾四間ハ徹る堂ニ候はり日本の道法
まて堂さし家一百弐拾間ゆへは本尊いろいろに志

やかやまうしく東向の堂ハ尊像も西向に座像に
向の堂ハ孫とは釈迦則ち仏よりて釈迦如来の自
作の仏也大かれりうくて志ぜんの大出を給ひしが
て堂形となりし其上此堂を作り申は御座の御
ひの輪とさ三間宛何りは堂の大サ日本の人に
ともと川合中あんまことまん度廻りは法度也
の廻り初めにまかり申は此程の大サとうく言葉
又は此堂の軒下をあるみ顔有は軒下いろくれの無う
節の町家よりて釈迦堂所と申は此国まてい年

李佛果等は皆ハ此尊像を堂ニ安置致し置候
中央に今佛の面〳〵に見えれは此ハの堂大きさ四
面とも〳〵三十弐拾間ほと天竺の内大山にありちと有
之海より山の峰へ渡りを南へ下り其中に此所
の堂并ひにうちとよ一ヶ所ニ沖月面ふくし
船を参りて中には精舎の堂ハ石の釈迦堂ある
追ふちらいさく一丈日なる南京大佛の堂四方ハ御
合せん大かた也中にもまる国の都より四拾弐里川上に具
檀特山ありより山の高さ三里十八丁程幅八丁長サ十
六間に而あり此山の岩にてよこ〳〵釈迦如来の説法な
されは由中の釈岩に而ならは釈迦如来の尊像あり
これらの此阿り都より見え迄四拾弐里の間町續
おもて三月末より四月中迄市立なりは日本へ諸人集
り十は霊鷲山より四拾三里川上に流沙川流れ中
ニちと足て尼禅石あり此岩のこうき三拾弐里ほとあり
此岩のうへに釈迦如来ざぜんなされし故尼禅
石と申由此所に諸佛の堂もありて釈迦の佛像
ととりしある也石より弐里川下に恒河の川の

とやは則此所ニ中天竺の闍耶波ニおとやは恒河
の長サ千弐百里を分ては由甚ニ所の尊ニやは七百余
の道法弐百里也流砂川ゟ七拾余里川上ニハ大
海と数百里迄ニ居ニ船を通しては海を此所の
関ニなりて夫ゟ川口迄ハ廣船乗り所やは天竺
の中ニ乗ちより川上を通やは此川の川ゟ川上迄
道法拾年ハ旅ハ行廣リ八年程ニ上下いたす岩
有て由やは檀特山ハ此川の川上の由夫迄ハ乗不
やは川ゟ奥ハ奥へ道法程を知る所やは限りなく

おそれしておれはちる也たへて弘川といふと
中所迄やうての国の数より八百里つゝ其此道中ニ
是やかたるとも中所ニ流り此所より多くの波数な
とよりやは是迄いやうて当の国也此所ゟ東申の
方ニ当り偏いふも雲国也此所ゟ弐百里の方ニ
當りて流ル七里ほと其いも其に方なるたの
らん国おらんたの国続ニありやは日本也しておせんへの
拠りありいはゐ叢の木大分ありて此所ハ釈迦如来の生
世ニ成り給ひなかれ見不しめ川の後此所を数葉ニ便

文字しるし由今に至迄毎年落葉に
きしの文字あらはれてしれたいの長さ
に此葉一つ葉とも中にて日本一備別にも
まて八幡宮と申寺一個堂中は観音菩薩
のさうれめ内は百里ヶ瀬と申所は瀬の東はそや
り国の末ぶちさらいの入口にて是は中々
出て屋しほとも申家子見候日本の新家子御座
候ハ二ヶ所ありけれ中に水田合御所有候
諸島とて十一浦のかに御座候とのよし被申候

小水武合御座候中は出て水吾なとふかくして
尾の水天守ふ〳〵覚悟いたし浪音に立て斗
七八升仕候御座候とふかくに候御座候の打し候如く
中天空ゆうて出にも御座候中は林てあり候は林の
御座候八つ時におゐて三月頃出て上下致させる雲
浦添はいかにもありまなかん下中は真の純木から
御座候と申けれはあんこ樹は川懐川の川口文由来の
紙は天川などいへる所は細天空とも松木ありて木
き候は松は天空で出ふらふ候は行は流れつさしおか

たきはる事しこそあれ此ゆへハ其ことあれハ親も斬し
のよいは細く流れの色ハ絶さし其の宮
ハきん程てしま小屋の忍物のとてハ
ハ男は荒むしろよくしてあれハ天竺の人から
日本今せいころくとつきあけ給ふしきれいまで
男ハ年よりての事はかりなりの上にて髪を剃申ハ
も京の風しと同事ふくけしいの中してこそあれ
女ハ御髪の油ハ申ハ日本の油ふくしてゆふ髪真
の御髪やしなひしは油ともいみも悪り申ハ髪ハ

からさけにて洗し衣裳ハ草物ふくし繻袢の色
も茂地黒紫のうちとさりし淡くあけ等
の様に見く其上にも何とやら徳のやうなる物
着し申ハ男ハ腰に刀ゆるしと申席下のやう
なる物つけ申ハ日本ふての脇差の心ふてこそあれ
男女共に見えと申ことのとかへありしと見え申ハ
上宮いへすの中らしくとまけなくハ立へ立ら
の中らしとなり申ハ此家ハ途中へ通り掛り
ハ何とも女ありハつハ其位まさつくと背中ハ思ひて女

のなりける道なと出る通を申は男のなりけると
出迎ちやうと申て中急なと其男のなり
ける頭に行申はちやうと申事は釈迦として生
の南天竺にて八日なん人なと申はてい女のことに
はうせちやうしと申彼か銭の法し申は米のこ
去梅雨は初いこ日六月十月よ上二度め米申
は三月と十月とハ中米なとく六月そのり中まい
能なとしと日米と改は米とても中時ハ稲いつりか
申穂出かりを申は又出るところに穂出申はて十月こ

米はなか申は一年に植つる後なくこ二度に
米出来申は其年の長一番なれ年ほと取は出来
候申に穂つけ種くくなり申は米俵となるなと
まい申は他一蔵なくかやうなとか作り四方斗ほか
入申は獣の類鳥家柄とねとるなくこ取は家こ
いろは株一家飼ふか申は東にわけしかく申は牛
なとさるは水牛とこ取は日本の牛のかく飼入
東にて仕つけ候は申は馬は日本の馬より小なり
ふては又猿ハ日本へハなし申は犬ハ清純にて

村中は其時おちたる壷に今に埋め置候よし
在都しも當中はむさきものなりと申て天気の人
は蝶の中は若やかに波似たる事有しと申觸へ
と候は是を為なりしと見遣りて村中は一は其
候将頭中は是を天気の言葉に事有しの爲にして
中は天川恒河流酒川に笑殺浦に候は蛇を
為すし為に候は川まくしる候水縦のいかしは時
囲おりけ其門まて水縦の流しは我き蛇半
村に其々かや中は流酒川は深き凡七八十尋

縦に其候は南河かくて一天氣縦始其は川筋へ
蛇上り者縁をいしいひきとし候て中は
ていたいてれの事みては縦不中蛇出縁入たりと
見合しは海其原の者大勢来り多分ら候大
なる九たと將縦り繩をかけて見て巻付て
将大もりふもれ大小にしらは武士人みは四五
十人くらふになれは輪わりありくらは縦を切やら
切分て取し候くは料理此て汝かに人とき
捕るくらは候は蛇の肉と小刺の縦ふれくらい

蛇の鱗を紀国へ献不申其滑なること一切物不
中ハ流砂川口ゟ出船役ハ附りかこ弐ご枚懐
中にてしんはいハ船名不申候附船頭中ハ不知候
内ニ蛇のうろこを持し人参合ハ候へハ船名不申
と申段蔵と申もの有ものうろこ川へ
捨ハ候へハ早速船出申ハ寸薬を済して申候ハ中天
竺の弁波羅造之物交渡て候てしハ仏舎織物
致させこし内其外いろいろ品手縁ノ経手一巻
給候ハ御座候所にてハ段様かこる出に而

流沙禅棚申聞日本中の前の如くに是ハ
海宝川異ときは所ハ大船ハ日本に到り不
申候も日本にハ渡り不申ハ右も弁阿に
てとし申ハ大方ハ西洋ニての事ハ出て候へハ後為
志の者にてとし一般まてく之前ハ枕にハ孔雀を
日本の舞の如し家るハ網中ハ鳳凰之形之飛
ハ候ハ孔雀ハ家の内へ通候中ハ孔雀ちや大事
ふてハ候て鳳凰の文をもてもて翁浦も之に之候
鳳凰孔雀と申ものハ中段ハ申出候ハ文書かたく

次くるに旗ハ日本の兵の如く鳥ハ拾則ち
くいふ兵とも白き鳥ふして忠義ハ云ふ日
本分天竺ト船積ミとし兼ねとめて翦子嫉度
余登場数消道具刀脇差忠又剣て至ル
沙ハ自分くの挿候とも外ハ前挿いとし
成中ニ天竺とて異兵に独ハ東都なりとの業
経数玉かく伽羅白檀紫檀沈数々香数面く天
唯寿洞船積ミしに日本分天竺渡りに船来
主とて乗に数合三百人候ふ中ニ長崎

長崎ハ京唐東の肥田と前く業同ハ云業の色
しかし成人を屋ひ道遣ふふして常世中ニ
ま数兵船の乗ハ人数九拾人まて渡り中ニ前
ふ云月中ニ出しけいふる山清生寺と申ハ
宮海渡天の時に任え故ニ年まてニとろくの祖
師達渡天の時の中天竺に住候由
右船渡天ニ付大坂町年寄清兵衛大坂
心斎橋浜道遣ハ長崎町ニ奉行所中宗正

薩州池山新右衛門永山三門太漢一蔵漂着

之口書案

松平薩摩守家来

池山新右衛門
年六拾歳

中原仲右衛門
年四拾歳

右申口

私共儀唐国江漂着仕候訳ハ此度當卯年四番同番唐船

より送来候ニ付相糺候処何れも上国致候船之様子
積荷物之品ニ濡之次第書付面ニ而吟味之上尚
ハ此段去卯年松平薩摩守代官之者渡海之琉
球国之内沖永良部島江為上番罷越候ニ付右之者
同役迄申聞候義ニ付右之者ヘ相尋候ニ付薩摩守申
付右者同年正月六日薩州山川湊出帆同廿日十六日
沖永良部島へ着船任先ニ送り届候ハ右之者之文代りとし
去ル巳六月迄上番仕候而右者薩州より代り役之者ハ
司交代仕代官之者渡海右之者ハ迄送り届候ニ付彼船

琉球船候右之者迄送り届候処乗組ハ難船之様子当地
相詰ハ薩摩守家来白尾等沖永良部島出帆
後洋中ニ而難風ニ逢五島之内一濤島江着仕候
乗組の者共船之儀薩州家来去ル巳十月薩州へ同船仕
ハ申中上候ハ
ニ乗組之船者拾人乗人之内右者薩州より乗組候ハ
拾反帆沖船致同国加世田小松原七左衛門船水主拾人
外ニ水主共之者沖永良部島之琉球人当世村浜
家之申人都合拾人相雇都合拾六人乗組其外沖永良部

船ハ琉球大島之荒元ニ而右船ハ米高四拾七石也
外ニ廉列ハ拵銭ト相納ハ帰三百六十八束を六枚
其外ニ旅人衆組の者共ハ兵廻諸道具船中粮米
其外此書ニ有之者共廉列之角柳木石船ニ積入
去ル巳ノ六月廿四日沖永良部島出帆仕候処沖中風不
順ニ而難儀致同廿六日琉球大島之内名瀬間
切と申湊ニ着船同所ニ而七月廿日迄滞船致し右
滞船中大島荒元ニ而相納候米四拾七石也并飯
右之外ハ薪揚ケ申し右納同廿一日同所出帆仕候処

同廿二日昼夜の風強く明ケ廿四日ハ大風雨ニ而昼夜の
様と相成一方角分り難く既に危く有之候ニ付先
帆柱を切捨候而楫も折り流し申し候て破損
致し居候而漂流仕候処同廿五日風和ニ而破船様々に集
楫を造りやうやく折り申し候而帆柱ニ仕候而
帆八反ニ縮め風ニ任せ子丑の方ニ一夜通しに
走り中ニ而其内段々風強く方角も見不申候
同夜ニ而数日漂流仕候ニ付船中呑水乏く
難儀仕候ニ付湖を焚き呑水

ニ仕候得共寒く候ニ付暖節ハ間もなく又々渡海仕
凌兼候ニ付同八月廿五日丑寅の風強く翌廿六日も
同様之風ニ而大雨降ニ付水桶ハ勿論諸道具
小破仕候ニ付天水を請溜置水ニ仕候得共浪ニ打こ
雨降ニ付溜置候得共右ニ付通船ヲ洋中ニ漂
十月ニ至り候ニ付同月中旬ゟ同十二月中迄
寅卯の風ニ而吹戻し同十二月子の風ニ而
並ニ北西の方へ出ニ小島を見懸候得共同十七日風
強く暮方ニ相成候ニ付小島六ヶ所見へ人家無之

夫ゟ戌亥の方へ流され大きなる島へ着ニ付夫ゟ右島を
見当ニ仕廻中ニ而潮の流れ強く相成中ニ而潮行ヨ
く大島へ着兼候夜又八丈島ニ吹返候得共御領内
風雨強く潮早く候中ニ乗移候ニ付同十六日
組共時分船流失致候ニ付間吹戻而小破船
下仕候武房郡ニ而吹定当所漂事ニ地方へ吹
付ケ候武房当所之様ニ而合共之武房ハ切揚
房ハ潮を掛候得へ走り入繋中ニ而同廿七日子の風強
大島候得之房郡ニ而同廿八日ニ而同様ニ吹続き難

役人ハ右山の如く成て唐国より来りて有之ハ此節唐
国よりも漂着ハ何も琉球人薩摩へ通路之儀も唐
の事へ對し候ハ由緒有之候ニ付無組ハ之
之内琉球人而人文字ハ能ハ少々も書ハ候間紙を利
日本人の様に仕る也世村ニ村右衛門浴衣を着右衛
と名附置中ハ四十九日請ル式ニ唐物麻を着唐
之風ニ拵置て凡二三間有之所に仮ニ船にて仕舞
所ニハ夜衣ニ用意の様ニて元に有之所
之候惣人数揃船に乗組候内唐の方へ参り候ハ

着ニ而唐人ともお目にかかり候て縄などを下ろし船を
川舟ハ破損之右様ニて綱なと差出し中ハ船端
あ而に仮船住ハ夫ヲ陸へ上ケ内之ハ人を呼倒ハ程
小風雨烈しく浦々も野原にあたり上ケ右之唐人共へ
ても具に仮住居出来候て人家ある所へ連行ハ候
相救ハ船無内取しく道々ほと行ハ浜之所へ入口ハ
晦日人家有之船ニ漸々船越揃ハ当番ハ夜
数其外にも隠ス唐人共通之間揃ハ一覧の様
成る所へ入置候唐人之文字を書見せ候国の者とも

前々之通ニ而相済候ニ付ニ相見候間日本国薩州
の者ニして一船拾九人乗組と申候者共ニ候
往来ニ飯酒菓子なと差遣ニ而舟路之手当候
此ニ付此地人家ニも飯給り候之漢より
此漢の寧波漂流人連渡り候ニ唐人参ニ而来本船浙
江寧波府定海縣之内普陀山と申所之漁舟之
大洋ニ而漂流之中漢より之故之由申候ニ付
此所役所船ニ而私唐人参ニ而来本船ニ而海上を参る
思ニ番所より之ニ而依而由申候ニ付

役人不残合館ニて右漁舟之紫可来ニ付船一連乗
此所之前広寺上神堂ニ候来候役人船ニ而出候右
之者先ニ番所役ニ而唐人ニ問合ニ付前ニ船頭之船漢
内ニ相文字ニ而候ニ付文字又ニ住所より申候ニ付天
寧波ニ而川上根子文字ニ而ニ見候ニ付其間右神堂
へ所帰ニ而相成候ニ付之小屋ニ而見届差置候ニ付其所ニ而
船則築なとも由申聞ニ付内ニ申所の者も漂流候由さ十
武無庵候の小家ニ補理申聞ニ置ニ相成候也御薬ニ入
宝食米之義ハ唐人不足無之菜蔬類の所ニ御差員

水主共二人ニ而今日迄無滞候処此中ニ而同夜被召捕
候役所ヘ右船ニ乗組候者漢字ヲ書見せ候
所海賊かくし有之候ニ付其所ニ而漢字無之文字者
候ハ小船ニ乗候而雇候船ニ乗り有之候ニ付
於当所船の為警固無之ニ付早朝迄差支候無之
右之者共ヲ役中国ニ而館ニ而見候間海賊ニ無之候ハ
いろいろ致承知ニ候由申聞候ニ付無事ニ而右役人衆ニ
者ニ者ヲ水ニ入無事ニ候而一日ニ帰り候
右三人者ヲ中ニ而翌二日朝右役人衆之相見

居候ニ付役所之右役所之柱所ハ大神宮ニ而
堂ニ而有之候所之漢字之由唐人見候国と申候所ニ而
同夜中ニ而役人衆之右役人来り
此役人衆之者共唐人見ル内ニ千総官と
申武官の下司ニ而把総と申海道守り
役人と申候由申之ニ
文字ヲ書見セ候間一流結ニ而候ニ付
右之次第を相尋候ニ付見セ候ニ而紙ニ書中
上ニ琉球国より薩州へ通船之節唐国へ漂着し

琉球ニては忘れ由ニ有之候ニ付日本国薩州之者
ニて十九人乗組栄寿丸と申積武州江戸江罷越
船ニ有之處逆風ニ逢帆柱楫等も損し数日洋中
漂流致候処流着仕候助命致呉候段文字ニ書入仕
形ニ而相答候ニ付右役人聞之者相渡置ニて右之
場所ニ而相分候而日限子ニて其後其間右去神ニ
郎り九月朔日迄朔在乗組之様ニ船破損ニて難立
此上は何れニ而も同様之事ニ無之一カ所ニ候ハゝ此右之
為見届参候ニ付此度右之者共乗組之者ニ渡入

夜前の先ニて半ニ而仕形致し相聞ニ候合点致候様子
ニて上神堂より右ニ而所役場ニ而海之役前ニ而
ニ連組候ニ付漂着之船ニ而不相帰心得ニ付候右
役人并ニ上陸場ニ而乗組之者共も其外様子ニて仕形ニて
為見届之候右役人共乗組之者ニ而乗組之者所
之申聞乗組之船ニ而候処船中乗組之者
中ニ而其上役中ニ而乗組中ニ而其外御蔵
之儀者此処ニ而仲間之者ハ其後乗組之者共
右様之者共之者船ニ而漂着之者右人数

同廿六日唐船壱艘ニ而漂着入津申候此漂船壱艘の内
大破損ニ而荷物の内取申候処此節十六日懐中ニ質物
貫文相済候ニ付右役人并ニ唐船中商人ニ為致壱積込
置候処右船懐船賃相拂五貫文右役人并ニ唐人より
取候也而も此間漂流貫文并沖ニ而漂流之ニ候
積入候処之内唐人荷物渡ニ付一桶ニ而追々同
又漂流之貫文唐船に申来右役人並唐人の者ニ為謝
礼之処追申候処右ニ而漂着之船其外入候ニ付同七日
船之船ニ而荷物ニ而仕形いたし為見入候ニ付不残荷

様入申候上陸の内仕舞候処也滞候処荷物も荷貨
之為候ニ付銭五百文并右申候右上陸之間食事
之儀の處右相済之様ニ而右見ル所ニ而其追々代銭
相拂申候ニ付右食事之謝ニ付人別漂流ニ付其
相拂申候ニ付同九日唐人とも相應ニ見せ候成右追候然
船ニ而之荷物ニ付船中漂流之様ニ而漂着の品相渡
様之方ニ而存候處右唐人荷物拂入候長旁方之候
施相渡し候ニ付仕形いたし追々ニ而同一荷物ニ而
可渡之様ニ相分ケ候ニ付而其渡ニ而之荷物ニ渡之

御極仕候いつれも江戸常刀ニ而義ハ随分ニ宜しく存候
此度ハ右仕形ニ而相尋候處唐人船一艘
海辺迄ニ漂着仕候ニ付右唐人之内壱人を
此地繕老翁と申者の由書付為見申候
此繕老翁と申ハ唐人ニ而武居人ニ而其千余
官と申武官よく則海辺を守る任郎の船徒
来翁と相役之由申候
同十二日又二艘船被入津是又依之事相尋候
右連れ唐人申候ニ者此船一艘ハ何事ニ而候哉と

紫貂ハ繕老翁船と申候一同ニ又漂着船ニ乗り
見合候而漂流の様子を相尋候處右聞候ニ付
日本の者共と申候相認漂流の様子相尋候處
是又右之通り申候ニ付其日出帆仕候唐人
此国朝廷法令を申候ニ付書付を常刀ニ而相渡候
依而右書付を相渡し候得ハ悦ひ候而御法度節刀
御殊ニ申候ニ付右唐人共ニ相尋候深切の
段ニ相見候ニ付右之通候此郷老翁の書付見申候
此郷老翁の唐人ニ武居人ニ而相尋候此郷老海旅

ニ曲史ニ而申渡し候別段筋書の字吟
味致候趣ニ而同様之趣所ニ而申之ニ付
同廿五日役者共ニ漂着帆ニて郎党共ニ船ニ而同
前日紫船同日夕ニ大船を破入津致し候旨ニ而
右役者共郎党共同様ニ唐人ニも相見へ是又同宿
小船紫船ニ而差出し船見船ニ而取締方申付候
取扱中ニ而同十九日ニ差送り船見之船漂着人并荷物治
役ニ而役人ニ而謝礼ニ為之差送り並ニ浦賀町奉行支配
改来役所ニ補所役所の役人ニ而差送り候

幕府ニ申来候節存候旨右之始末役人ニ追而取計
差送り候何れも私方ニ而漂着中ニ而船同様
日迄所役大船を破壊之儀何も致し入津右之
来ル宿人ニ而取扱候処人ニも相見へ候所役之内
当役の唐人も拾人程右之ニ而右之宿人ニ付
拿捕之差遣し船之船ニ而前條之件船見之事
漂着の次第等相尋候ニ而漂着ニ而右之趣ニ同様ニ漂
着の節仕候ニ文字等ニ而書付ニ而申出候日付
漂流ニ而右之識右唐人相尋候様ニ而申出候ニ付

從夫豚肉鷄羊肉菜類等家畜一船之者右而一
船之半を渡候ニ付日本ゟ之送り之文字
相認見せ候処其の辞候ニ付未夕船ゟ者船ニ
聞取候ニ付右為諸見官人の船ゟ存識漂着ニ
迄中ニハ右官人之名家承り候ニ付章渡候ニ付海線
之知線所大義と書付為見候ニハ
此大義と中官人ニ之儀ニ唐人ゟ者日本之船ゟ則定
海線之知線七品ニ而も一線之所沼年貢諸
運上共ニ候ニ付安配致候ハ官人ニ而も是ハ何事か中之由

何れ之宗旨役人ニ而相見候ニハ前書之所ニ而定済
者ハ唐人と對談之段文字仕候ニ付双方
推量ニ而漸事相分り申候ニ付未夕者所漂着ニ而物ハ一向
何事ニも分兼ハ甚追而双方ニ書付文ハ仕候ニ付
候ニ付而者識相見日本の例国則ニハ先有之ニ付
何事も未た船中ニ而者仕候ニ付右之所大義ニ而
漸ニ而達之日本通ニ相と相聞て候ニ付返答ニ而
之ハ上通之風聞候事定海線ニ付所ニ而城下一川
入之所大義中付之由ニハ間一円安心仕候ニ付

同十一日九ツ時頃松前船ハ楫ヲ取引捨被成御附小
船ヘ乗移り候人数之者共組頭源六并知工源之丞
右之外蔵之助兵衛相郷右衛門兵衛〆十四人漂泊
船ハ船と一同ニ見流右大洋一面之漂泊ニ而
沈没致候ニ源四郎弟共々漂泊相談候ニ付松前
之者共ニ而本国へ帰養生致候同日胡船頭作
船中ニ而ハ下役揚も出て樵木ヲ取其日凡七八里
程流ニ而元之織之如風と向ハ七ツ時比漸く入湊
繋留し番船ニ而被附居候ニ而船ハ漸帰り船

乗ハ最早川筋中ニ而ハ四五町程湊ヘ右之役船引出
所湊之中ニ而五里余り之如風無悪浦前之様之御
潮懸り候て候其先三百間程ニ而漂流近所ハ津右
物而湊之船ニ旦泊合浜之候ニ而蔵漁村ニ而同七ツ時頃
定漁船之中之所ハ由漂国共之船ニ而乗り組郷兵衛
之者漁ニ附り候之より延方申候船其之事ハ之漁
滞候之内之船之所御迄ハ延ハ子と申者ニ舞之様子
作ハ又又ハ源之助之通申名郷兵衛中安藤
之候仕於ハとハ松之如合点致者方ハとハ其漁中ハ

其後松兵衛儀ハ右漢船寄ニ付帯船ニて出帆致し候處
極月十八日夜中難風ニ逢ひ漂流致し有之候
就然同十四日松兵衛并乗組之者共漂流之者與候節與
如何与申候
此漂流之者を以御奉行所江相知海
邊江相守ニ當所へ差出候由申之ニ
承候ハ一ヶ所大清船江寄候處之唐人共唐人并夫々相渡候由
ニ而漂流之者共ニ相渡候上漂流之者死骸共
相渡候葬礼之儀由伝候ニ付人足共相渡

分より出帆中之間ニ松兵衛ここより見届之者共迄相
伝候所々ニ而松兵衛らと申候由ニ付右唐人共ニ持
参死骸帰之入一両人ニ而間筋申上松兵衛ハ入水
其節船合之人共ニ相知唐人共ニ申遣し候由
ハ持参葬ハ由目なしの葬送ニ而遺骨ハ送る様子ニ付
之由承り共出候由中ニ而且又唐人共ニ松兵衛
人は唐人ニ華麗異様之者共之趣意ニ付見送り
又人水之共へも食物等一同ニ差出候間共合
後中ニ而同十五日唐人共ニ中ニ唐人の由伝へ候ニ人

右達て松前殿ゟ来り
一此節出張いたし中官人の役ニ唐人共へ相知候ニ付
海旅之巡検使として中ニ民家をかまへ候ニ付申立ニて
蘭船相渡候て帳面と書簡与共ニ御役人衆へ届
人之人ニ相渡し之ニ宜しく相見候也ニ付一流体ニ而候
ともかく推量致し此節ハ松前家の手前中
其蘭船も一同ニ入津一件ニ付松前江御達人上陸致
右ニ入津致候之御場ニ蘭船ニ而請取中ニ而且又蘭船
持運候人共へ相渡し候ニ付御取調松前ニ而人ニ相渡候

然処ハ持運候之の途中見廻り改ニ様子中聞ニ付
書付ニいたし一件ニ付相違ニ而松前中ニ而段々為相越候ニ付人
請取候右達し上陸いたし相越為見候ニ唐人共ニ案内
為致ニ付常の通ニいたし所ニ而高生宮ニ而中親相見
同所ニ致し候て観音堂ニいたし相知候所ニ而右之通ニ相認
是迄之通ニ而仕候いたし蘭船ニ而此節ハ人ニ而
此様ニ相数取調候間是ニ而右之儀ハ其段右之通
取調候て取大蘭来り候ニ付蘭船揚為致ニ付
中聞蘭船持運候ニ付持ニ相ニ而取調候体右之通

武ハ船ニ而上宮家荷物送り桐ヶ谷ニ而廓光寺ニ
合ハ之荷物揚ケ其船頭ニ而ハ右之案内申聞ケ宇右衛門
唐人共ニ而荷物揚候ニ付右之旨同様取計大船ニ而荷揚
其日荷物揚ケ方相済同廿七日迄右同様ニ仕方之
荷揚致し同日右仕廻ニ付同伴右衛門其外之者一同
右船ニ而荷物帰国仕候ニ付其船宮船ニ而相済候間船
当水主三月出帆致候ニ付御船ニ而唐人仕舞致し
右之者同水主共ニ而同様相済中ニ而異人陳
氏陸氏ニ申唐人

此陳氏陸氏ゟ申出候唐人共ヘ桐原寺家ニ而相頼候の書
記候ニ付而者右之趣申上候ニ付
私共儀右之者共之掛り之儀ハ右見合ニ付相済候
世話致し食事之儀ハ米麦野菜酒等迄も
日々右陳氏陸氏より差送り候ニ付
此儀右之日用諸雑費之儀唐人共ヘ相渡候而相済
当申諸事之儀定而御存之ヘ御用ニ付書付致候
氏陸氏ハ唐山ニ而在年追而御定之相成候事之由
申之候

私貿船より持渡候鍮金ニ付而ハ人参ニ替せ申候
七日御送り被成候同十月晦日順大老ニ而送り被申
ニ付薬并食物等積ミ唐人持来候ニ付出張尚
又唐漢之本帰着物負物帽子一向取込候ニ付
唐人取立候一同相送り十字以て相渡候得ハ同
十二月十八日徐大老より唐人
十六日徐大老より唐人の漂流人先ツ相渡候ニ付知寧
波府の知府正四品ニ而一二府の頭目条貢議
筆上ニ而送り候其鄞縣之唐人の由申之候

順大老ニ而前々御一同ニ相送り候ニ付其船中々荒申候役筋
相成ニ而ハ海上相通候中ニ荷物渡ニ相渡船々
其船の間数ハ相渡候得共其様ニ相渡若ニ而来り候
家之御米壹先便之貳百相成ハ先達而大厳
由ニ而殿屋敷ニハ銀長刀弓矢ニ而壱分月分之路銀相
被仰付七日順大老衆日相通相劉別来ル由申
唐人了之候
廿日相当の同劉別ニ被成唐人ニ而来ル相尋候ニ付日相通
相ニ中ニ小ニ送之候ニ漂流人並ニ唐国ニ而無之候

分家ハ日本通事唐通事の唐人屋敷番浮とて甚多し
此日本通事唐通事の外に又蘇州花氏十二家の家
ハ平湖縣乍浦鎮之半故定海縣へ総合いたし花氏
此十二家の内花氏より日本通詞ニ相成候
一 中村右剣刑部ハ元年日本へ参て出張いたし
若年右之者共致通詞ゟ為候事
右通詞役いたし私共申開ニ付書状差出候ニ付
此船ともハ大海帰帆相成候間補作いたし右ハ船之
商売日本渡海の商船ニ而乗送る中に而多年渡

来帆投錨の後補役ニ而私共船ともハ荒海異国ニ候
於船中私船ニ而罷越候先ニ而右屋敷ニ来りたる来
奥州他島の者拾之人漂流来候右之外の者共
ハ申ニ付私共一同ニ而見合候ハ船具未進ニ而帰帆
其後ニ而是非とも船并商売船具の分不残為積
の海上中国ニ而致渡候私共船をて荒海同論とも
右其船ニ而二百日程私共船ニ渡り候而世話
其以陳氏陸氏より中鉞ニ而舟通事同而ハ私船
長崎港船場へ乗鉞陳氏陸氏右船ニ渡し候而中ニ

然処同十二月十二日右船之代物として唐人船中
貫文通詞を以相渡候ニ付船頭長兵衛と申者ニ
薪書之通願候大和者合候品を請候間濃かにと
中渡し書物出二品遣し心付ニ付而通事之案内候処
而大坂出船ニ付候処佐ニ付船頭麻上下着用
仕通事同道ニて候大和者役所ニ参り其品掛
候ニ付品物之内芭蕉布十巻焼酎酒一壺紅花一斤
差遣候所殊ニ世話ニ相成候ニ付通詞を以中山王家
候大和者共丁寧ニ扱候ニ付右ニ付同一同

と申官人の役所ニ而取職
此同一同と申官人の家唐人差添ニ大和人と武官
遊撃の職ニてこれ有候由ニ付
滞留中を請て大和ニ乳中途ニ至候大和者
共之通事中國ニ而同所ニ而取職ニ而官人
對面之上宿一週中ニ而同十九日招請之處人と
大和人李大人と申官人の申付候ニ大坂右連来
此李大人と申官人之役所へ参り申海辺
在相守ニ而総兵官と中正之品を武官ニて

常躰の事ニ候尤生打と申候者紀州浦方日本人
漂流ニ相成候ニ付事ニ寄り参候者申聞候事ニ候人宿
自分荷物見分ニ附候ハヽ事と相聞候由唐人共申候之ニ付
此節とて如斯御積荷物ニ而送り候見分有之候今波
出帆こそれとも候得ハ唐方通事ニ而唐人共申候ハ浮荷取扱
而通用相成唐船ニ積込取計申候ハ日本町より
食物ニ而無之候荷造り荷物船ニ而積込候ニ付候積物ハ
不残出帆ニ付候ハ深切と申候て相見候唐人共ニ謝
禮として私荷物ニ而同船ニ積込候て出帆候事紙

其物ハ当年ハ御遠慮ハ相成候ハ段々取計ニ而船之
状ニ而も相返候て出帆ハ其ニ付ハ御船同年正月出帆
大坂より通事共ニ而申付候得者荷物等一切申付た
浦々申渡し候へ送りも有之船ニ而被申候荷物相分り
目録之と紀州与申荷物積込候而船中渡ニ而荷物積
仕候人足ニ而御付其日より船積ニ而同年正月ニ荷物ニ而
候大坂通事ニ而遠慮ニ而候て積換出帆ニ付
而又船ニ私共不残荷物船ニ而乗ニ通事申之ニ付右
同日説被差出候段も被下候之ニ付同日本人諸方々

寧波府之船頭長崎永三郎来候次第ハ寧波府并
船合八人英通詞劉則米外ニ役人都合三人唐人
之人数組外ニ大勝三十仲右衛門並ニ深台横右衛門
永三郎并寧波府出ニ而御座候琉球
ニ而唐人ハ永三郎并村役家船合拾人外ニ役人
都合唐人三拾人数組ハ外船中同意ニ而相成候莫叢
茶植物ハ所大船ヨリ差遣ハ同所寧海縣之漢
出帆致し候風ニ而帆を張候所凡三拾里程と見
唐ノ波濤ニ而同年五月廿六日出立六月十七日

漂着船ハ右ニ付左浦と申所の由通事申候
此左浦ニ而唐人共ハ相尋ヘ候処浙江省嘉興府
平湖縣之者ニ而候日本ヘ無漂流海上ニ而船仕
出し漂着いたし候趣由申之候
翌十八日於長崎上陸いたし候通事申之候処
貿易ニ而参り候者ニ而家之内浙江省と
申唐人申渡候
此儀浙江省唐人共ハ去年日本通商船
十武家之同屋ニ而唐人共船中ニ而仕付候

諸荷物積入之義日本之唐船阿蘭陀船之代り
物之儀ニ付此度漂流人共官府ゟ申付浙江嘉
興府乍浦ゟ出帆仕候唐人共申之候
然る様子ニ而段々荷物相改不残其前ニ為
帰日本へ為差遣候右之次第滞留為致候由通事
中聞リ之食事其外是下宿之致世話候
此漂流人之儀日本國諸船之者唐人共日本へ参候所
漂流人共日本へ護送之義乍浦縣令日本へ通商
の范氏十二家荷主共へ申付候ニ付乍浦滞留之内ハ

諸船共ニ荷主共ゟ之船無之唐人共是申之候
此所ゟ日本へ通商之船仕出候所ニ而由承り候此
同正月元日年頭ニ為致乍浦の諸唐人中ゟ船
相並ぶ通詞ゟ申付仲右衛門共ニ相勤る所ニ而来
所致ス事ハ三右衛門共人々前ニ承り候御門之名
右通事来客内ニ而致所勘之前ハ所右衛門
此往所勘之礼ハ前之唐人共よ参り候乍浦也
役之文官武官の役所ニ而出屋敷由中之候
其後右通事ゟ礼之儀相渡仕候ニ付右之由見え

諸ん紙通事劉則米常同日本数書人池山表之
叩前叩前と濟旨之以て取表右同紙ニ而毛挊
立場ニ而済是唐人禰之者色書付て写事ニ取持ニ而
有之由不申紙ニ以通事右主取紙取承印禰之唐人
一右之通取極中ニ付同月二日松浦肥前へ左浦之前夜
登城之申候人相見
此肩大荒と申異唐人表へ出奔ニ付牢湖擦之
紛錬筆稍して　下脱文
私先氏水之表へ出不致面談候し来月初旬本

国ニ而送候右通事ニ以テ段々様役有之ニ付私共へ
続而請候ニ付且又仲右衛門不人情ニ而右衛門正月十日比ゟ
池澗之病ニ相煩候ニ付取之醫師ヲ以人申付候薬等為
役人参迄相用候ニ付是養生不申付同十二日病死仕候ニ付
三月葬之式通事心得ニ付申聞候ニ付猶尤人其外之
手当候處ニ付私共ゟ人英水之上出納合之人為
見届候處ニ付然ル唐人共之無之様ニ付候へとも送り之趣ニ而
小葬式之第一源氏寺葬之式ニ之通事共之相済ニ
在之由ニ付人ゟ之表ニ取極中間ニ付右之通ニ候之

此故阿蘭陀人参代之節唐人共ニ價之儀ニ付申立候
事ニ候而ハ入口通候共国之ニ不及ニ申候間も
深切ニ相願候事申付同二月朔日ニ於広間日本伝之諭
子細入縮緬綸子羽織唐物之紬緞共ニ究候ニ付
是民家ニ而ハ咬𠺕吧並ニ人々求之候由日本伝之紬緞
同羽織其外究候之又咬𠺕吧民家ニ而咬𠺕吧無事御座候而
諸永泰方諸ニ而咬𠺕吧抔在留之者共ハ願候ニ付諸色買
入用之候ニ付由ニ而咬𠺕吧ハ其時仲介之儀請候由ニ候
右ニ云ル花旗ニ而ハ人合居候ニ付其書付見せ候

二月ニ云ル花旗ニ而ハ人とも中ニ而咬𠺕吧ニ於日本ニ通商之
商売之由無事ニ候間候

右ニ云ル花旗ハ咬𠺕吧唐人之出來候處ニ而ハ云ル
日本無商売十二家の船ニ而花旗ハ花氏の船ニ而も
此之所ハ由緒之候

右咬𠺕吧之国ニ付其又右船ニ而之門の由ニ而ハ之勝
列ニ而中家より流雲膳ニ而中唐人ニ而ハ逆ニ而在浦へ
我船居留ニ而同所ニ而船造ニ而候然ニ而注申上候得ハ
其申候

一此藤例分沢雲膳と申者右浦ニ而紙候伏唐
人共ニ相参候処右沢雲膳ハ十二家の若輩ニ而
小ふさニ而ハ当流流人共日本へ渡り道も無年
湖縁より十二家苑氏安藤と者へ申付ニ而右渡
道の上当其外諸事心得の為右浦ニ而紙ニ而
唐人共申之候
私共儀直ニ右浦ニ参候因為御用ニ而同日
為順之条始ニ相廻り候所ニ而久之出不候得共
且同様之しまし候処右蒙御免ニ中武官役所の
由此所ニ而ハ薬種之類相渡り候ニ付
此度管府の儀唐人共ニ相参候処右浦地ニ而
武官の役所ニ而も右由申之候
皆共ニ相聞き候ニ而相見候処より廿三人共届
共頭続の如大勢不違相渡共人ハ巴拾粟案共人
十七八歳共人ハ十五六歳の条様ニ私共ニ見候物
の為相渡ニ而段と相見候余様定之候て右様文
御頼儀なとも相渡候節申相渡中ニ而同日届謝
永恭見書院ニ見え候処ニ而私共罷出唐人共

與力拵之の薩摩にて候し

此薩摩ハいつれの義仕候而唐人共ゟ相頼候而唐
国ニ而ハ指引答節ハ其品ハ通し候得者ハ義ニ而
前之ハ申右薩摩方ハ漂流人為致送届引合候て
相渡ハ為通し候而申之之候ハ其物薩摩之為
天官爆抔と申外題御仕組ま分三国忠次郎
候ハの国ニて多く之表之ハ杉屋共仕候由唐人
共申候ハ

夜之八十寧の料理など申付承之候ても振舞右御膳を

前之薩摩之者抔ゟ疑申候此迄答候ハ仕候ハ右薩摩ハ日
本之者抔ニ又ハ通なとのやうに相見候得ハ一向不
相知候同所ハ通事申候ハ日本渡海の船ニ被成之
船を漂着唐薩摩渡之と申候ハ右渡ハ被右船より
之送届候船ニ条組ハ拾十間此度同日漂着之念
船ハいつ者ニ而出帆同ト人許仕候而右出帆致候ニ付
此ニ無事ニ而ト年来役人の仕候右役人等組漂着之
船ハ仲右衛門下人漂着此ニ候右出帆無事ニ而着候而
無一通ハ御在出帆ニ而琉球ニ差此ニ出候村役家報合

九人乗組右之通り船頭ハ武兵衛其外荷物之儀
右武兵衛ニ積入申ハ宝海源兵衛と申者之内 美
右浦ハ末ノ浦ニて候ニ付寧の船頭ハ右之船
ニ乗居右右浦ニ而罷在候人名ハ譲別不ニ乗込追
長崎着之船ニ上り候所請取通り之記ハ松前乗組
ハ居船武兵衛当二月十日一同右浦出船仕候所
去ル三月廿日ニ乗ハ薩摩居船ハ此節之分ハ何国ニも
船者有申ハ同十四日右船仕候仲右衛門ハ薩摩
之船ハ乗後ハ風雨悪難ニ而同十二日薩州

大島浦ハ湖紫波羽ニ十四日風立ニ付同所ニ而船同
十五日又之風向ニ肥後国天草郡富岡沖ニ而破船仕候
相紫ハ船其船より当船之相済高月二日順風ニ
而候ハ二月済着之船之処積之所右紫藩門之
ハ船相又風悪ニ肥後国桃浦村沖ハ破船仕候ニ
同所着八日迄滞留仕候ハ船風立ハ候同日右積船ニ
付其之積送同九日長崎着之船仕候
右之通り申ハ船唐国滞留中物之外宗門御改等
申之候方ハ右船之節之月之ハ之方船ハ上申無之候

吟味之上ニ候ハヽ

此段私共儀唐国滞留中何方ニ而茂切支丹宗門
勤之者ニ而段々申出候所ニ而右体之様子承り所ニ而候
勿論心付ニ而茂無之候ニ付差障ニ相成候事も無御座候
惣而様之儀外国之者ニ付
私共前格之趣意然ニ唐国滞留之上ニ唐人共ニ申出候
勿論滞在之者ニ而も申出候ハ構無之趣候ニ付後日之節ニ而承り
之段全很前此表段々申出且ニ唐国滞留中商売方之儀
御吟味ニ而候

此段私共琉球国之内沖永良部島上書之文言ニ付
節船之積ニ而武器類唐国滞留之上国法之通ニ申
聞ニ付唐人へ申遣ニ付申付候ニ付而申通ニ相成
其外段々申出候ニ付段々相成候ニ付而人ニ而勿論
此者共之内前格之様子申遣相成候様ニ申付候
段々遣之由ニ而相成候之義ハ宗門一向前格之儀ニ付
沖永良部島前格ニ付而其後唐国並ニ相成
段於聞取候ニ付帰ニ付先是又前格相成候
相違無之候ニ付滞留中商売方之間補候ニ付

右之通少茂相違無御座候以上

安永三年甲午三月　中原仲右衛門

池山忠三郎

御奉行所

唐国　大漢厳
定海縣
石浦　　三柏子

此三ヶ所之様子問候ヘ同大漢厳ヘ着船之節之由漂流人共申之候

一人物之義日本ニ相替候儀無之候得共男ハ頭を長く延上ケ
かしら髪を結ひ廻し打ニ組候而後へ下ケ候而額ニ
天鵞絨の帽子を被り帽子の上ニ赤き糸を付帰り
衣類ハ紬綾紬木綿抔を綿入ニ仕立腰付の所ハ細く拵
着黒羅紗等ニ色の紬綾緞子木綿の筒袖の着物に仕立
上着之筒袖ニ而羽織様之類仕立胸を牡丹ニ而つけ
はさミし婦人の足袋を履候而又ハ革ニ而拵候沓を
はき候官人并ハ衣類ニ同様ニ而色ハ紺色多く
唐人之由唐人共も同様之衣類を木綿ニ而仕立

若殿多くハ上京ニ而京鴨ト出来候而公家衆
ニおいて出来ハ間純の長袖ニ候故之ニ而京し
胸ハ牡丹風ニ而染ニ縮子或ハ絹綾等の類染の模様
物ニ京鹿子ニ絞ニ而合眼ニ而京遊行様之花五彩
を師等ニ染し併せ如ハ京染様の算ニ而候へハ京縫
師ハ其ニ於而衣服ニ而京縫ハ同相伝ニ而候と存候
由大坂辺ニてハ如見風ニ而申候由

一食物の事 菓子類并似貴ハ饅頭羅餅杯ニ而似寄
候実多く御座候へハ其外鶏卵ニ羊羹の肉等ニ而候ニ而
用野菜ハ是ミ日々ニ相替候処申候由食事ハ成丈
若ハ右其肉野菜ニ而相用申候又ハ潔斎と設菜ニ而候而
盛ニ而第ニ而其ハ外聞等ニ酒宴流人共食事ト同様之設
相止ニ而其外肴之味噌ハ塩ニ而酒菜醤油ニ而日
御ニ是迄之相替候ニ而是迄候へし

一家作之事 屋根ハ瓦ニ而尾棟白壁ニ而之有之候
者二階作りニ而もしくハ又問ニ而居屋之藤葺ニ而一向
之と蹄追ニハ板塀構諸家共もあり候二戸口ハ冠戸
ハ之ハ柱ハ紙之丸柱ニ而張りしまひこおもて一統紙

離こ而ハ右門より内日本の堂の如くにて表向ニ百
姓漢人雅の家ニ者ハ常住有之候由家来ニ相
見へ居候番の家ハ見へ候ヶ所中ハ由と役人ハ役宅又城
一 姓名ハ唐ハ不知候唐人ハ名ハ不知候ハ無之一統ニ相応
ハ床ニ蒲団を敷候帳の類無之とも申ニ候志ハ
無之候由
一 城塀の東に在之海辺ハ右之浦在之門様ニ而外郭ニ有之
一 奉行ハ右之門ニ而ハ渡ニ候ニ而渡ス橋有之ニおりん而
有開ニ並ヘ出候こる者も十間程も相見へ候ニ而楼も有之候ニ而在

右渡ニハ楼門有之一丈余も相見へ候中右位ニ候得
一 九ヶ年中の築地ニ而唐門と町有之而唐人ニ而商家
諸職人共々住居の様ニ相見へ候而漂流人ニ而
遠ニ而見へ候得ハ役所ニハ宿坊と有之由と大漢ニ而役宅
一 海辺ハ浦ニ有之名静かニ有之而漂流人
一 とも中之ハ
一 右池の中ニ流一艘有之程ハ相見へ候ハ沖ニ而もこる山ハ出
小見へ候ヶ所ニハ草木茂りハ山有之而山間ニ畑も
相見へ候而見へ候海ハ遠浅ニ而波荒く潮満の泥

多く御座候由草木ハ梅桃竹ハかりニて松ハ
見得不申草ハ種々ニ御座候得共心付不申候
一 右之花之漂流人共滞留中橘水仙其外色々之花
咲候得共名ハ不申候
一 鳥獣之事 獣之牛馬犬豕ハ見得申候馬ハ余り
…
一 …
…
…

見得不申候由
一 寒暖之事 漂流人共去八月下旬漂流候処其
見得不申正月二月迄之内暖日多く候得共
覚申候雪ハ降候得共積り候義ハ無之花ハ咲候事ハ
不相替大風雨地震とも折々有之候由
一 産業之事 諸職人有之候得共見候者ハ決而
織物なと致候様子も相見へ不申候由医師ハ有之
候て漂流人共の内病人有之候砌脈を見
病症知書等読候間薬…

御薬店ニ売ル為ニ役相合セ申候由　其外醫師
ニ付候而ハ漢師ニも海遠ク渡り候而見へ候ニ付
日本の漢師ニ劣り候而相勤候様ニ候由
一　耕織之事ニ而も役料ニ而一向見へ不申候　源流及ち
役所之所ニ而ハ業ハ其業大根から草衣ニ植付有
ニ而も見へ候得共の絵摘ニ候得共ハ不申候由
一　此様の事正月元日ニ備ヘ候而松飾ニ付候日本の
一　雑煮の心ニ相見へ候由　松飾ハ有之候の様子ニ而ハ不相見へ候
官民共ニ紙屋紙ニ角ニ切大文字ニ書て福壽
康寧文字一字ツゝ書角違ニ為ニ用門ニ張ル有之候
瑜伽の前ニハ法花の経文前ニ大字ニ書福禄壽
三星の画像を掛け相祭候事　其様の儀ハ共ニ供来
候由ニ候様子ニ御座候由　其外ニ諸事の様子不見申
候由
一　寺院之内ニ間々有之候ニ付佛事等営候様子
見請不申候由
右之通相答候ニ付　従役所ニ而之所ニ遠慮候外
猶之外ニも存候ニ御座候様ニ候ニ付不申候由　漂

流人寛文十之年以上

寅年

三月

禅宗　同　松平薩摩守家来　池山彦三郎　年五十五歳

真言宗　同　中原仲右衛門　同四十二歳

禅宗　右池山彦三郎家来下人　清右衛門　同四十五歳

法花宗　同　長右衛門　同四十歳

禅宗　右中原仲右衛門下人　源吉　同三十歳

松平薩摩守領分薩摩加世田小松原

禅宗　沖永良部　長右衛門　同四十一歳

同所同国久志浦

同宗　永之　与平　同四十五歳

同郡同所
同宗　同　　次右衛門
　　　　　　同二十六才
同宗　同　右同郡同国加賀国小松京
　　　　　　喜平
　　　　　　同二十六才
同宗　同　右同郡同出久志浦
　　　　　　茄右衛門
　　　　　　同二十八才
真言宗　同　右同郡塩治
　　　　　　長右衛門
　　　　　　同五十七才
浄土宗　同　右同郡同所
　　　　　　与一右衛門
　　　　　　同五十六才
禅宗　同　右同郡同所
　　　　　　佐次
　　　　　　同十九才
浄土宗　同　右同郡同所
　　　　　　鉄右衛門
　　　　　　同五十七才
禅宗　同　右同郡同出秋月
　　　　　　兵平次
　　　　　　同五十三才

池山兵三右衛門中原仲右衛門へ相渡候品々覚

一　鑓　弐筋　　一　弓　弐張
一　長刀　壱振　　一　半弓　一張
一　矢　三拾六筋　　一　矢箱　弐ツ
一　刀　九腰　　一　脇差　五腰

一 踊台　壱ツ
一 絵掛物　廿幅
一 硯箱　弐組
一 算盤　壱面
一 煙草盆　九面
一 吸物椀　拾人前
一 飯次　三ツ
一 無当之　壱組
一 重箱　四組

一 両掛挟箱　弐荷
一 天文[illegible]　壱箱
一 秤　壱挺
一 盆　九枚
一 椀　弐拾人前
一 同膳　拾人前
一 飯次臺　弐
一 湯次　弐
一 折敷　三拾枚

一 鞍　壱組
一 洞面盆　壱ツ
一 和銭　七百八[illegible]七百文
一 紗綾蒲団　壱ツ
一 黒平目綿入　壱ツ
一 紗綾子綿入　弐
一 黒平目袷　壱ツ
一 縞め袷　壱ツ
一 羽二重綿入羽織　壱ツ

一 からかさ　弐本
一 盥　壱ツ
一 夜蒲団　壱ツ
一 油蒲団　壱ツ
一 縞子綿入　壱ツ
一 黒め綿入　壱ツ
一 縞子　壱ツ
一 紗綾袷　壱ツ
一 さらさ袷羽織　壱ツ

一 七子袷羽織 壱ツ
一 紗綾袷羽織 壱ツ
一 紗綾襦袢 壱ツ
一 呉羅帯 弐筋
一 麻上下 六具
一 茶宇袴 壱具
一 布袴 弐具
一 [illegible]袴 三具
一 火事装束 壱揃

一 紗綾袷羽織 三ツ
一 [illegible]袷羽織 壱ツ
一 縮緬単羽織 壱ツ
一 晒単羽織 壱ツ
一 緞子野袴 壱具
一 木綿袴 拾五具
一 帷子 三ツ
一 蚊屋 弐張
一 木綿夜着 三ツ

一 木綿蒲団 壱ツ
一 同袷 五ツ
一 木綿単物 五ツ
一 同浴衣 弐
一 桐油合羽 壱ツ
一 琉球太布 四百八拾[illegible]四枚
一 同馬皮 三拾八枚
一 同紬 壱ツ
一 同布 拾三反

一 同綿入 弐
一 同袷羽織 弐
一 縞襦袢 壱ツ
一 同合羽 弐
一 琉球太布 三百廿六枚
是ハ琉球沖之永良部島より差
別段之収納物ニ而[illegible]
一 同野馬皮 拾三枚
一 同木綿 百七拾三反
一 同真綿 弐把

一 同芭蕉布 千七拾反
一 同壺 大小 四拾弐枚
一 茶臺 弐拾四
一 同皿 拾壱枚
一 同焼酒 四壺
一 同菓子 一籠
一 墨 拾挺
一 色唐紙 日かた 弐拾枚
一 羊毛織 日かた 壱切

一 吸物椀 拾人前
一 同硯箱 四枚
一 茶碗 百拾九
一 同瓶 弐拾四
一 墨附硯 弐桶
一 南毛氈 三枚
是ハ主上御所ニ而召上り候由
琉球より求しは
一 線香 日かた 十九把

池山新之丞中原仲之丞唐物之内買物仕候之覚

一 木綿唐反物 弐
一 毛帽子 弐
一 紬唐縞 弐
一 足袋 弐足
一 南毛氈 弐枚
一 毛蒲團 壱
一 手燭 六
一 掃箒 弐

一 同袴 弐
但右袴之海綿服大磯台出申候
一 日本仕立之縞子帯 弐
一 同縞縮緬入羽織 弐
一 沓 弐足
一 蒔絵草箱 三
一 だんつう 三枚
一 紋縮緬 四切

一 撫物之　弐対
一 目鏡　弐
一 眼目鏡　弐
一 茶器　六百揃
一 平安散　六箱
一 烟桿　二箱
一 線香　十二束
一 扇子　百弐本
一 墨 大小　百四挺

一 焼物花瓶　弐
一 同瓶　三対
一 鏡　二面
一 安息香　五箱
一 東金箋　二百五拾包
一 食籠　弐ツ組
一 菓子　五百斤
一 焼瓷　四ツ
一 筆 大小　弐百本

一 白半切唐紙　四拾束
一 絵 大小　七幅四枚
一 廣輿記　壱部　拾六冊
一 康煕字典　六拾冊
一 中箱　弐ツ
一 茶釣し　四ツ
一 舟　弐ツ
一 真漆卓櫃之具　八ツ
一 きせる　五本

一 石摺墨絵　十二幅十二枚
一 繍絵翎毛　一部　拾冊
一 新増廣輿記　一部　拾六冊
一 唐律韻吹　六冊
一 蓋茶碗　三拾弐
一 茶碗　六八
一 焼物匕　拾壱
一 同くさり　弐筋
一 刻たばこ　弐包

一 蝋燭　四拾本　　一 行灯　拾包

一 唐枕　壱ツ

一 右者於大浦日本通商之為右品々差間合無之候ニ付

見物小屋ニ居候人足買申候ニ付

池山屋左衛門中京伊右衛門右両人英吹之候

持参候ニ付取調之覚

一 象牙箸　壱　　一 筏履　弐房

一 帆　三梱　　一 綱　拾梱

一 松極下板　四枚　　一 松汁　少々

一 櫓　弐本　　一 櫂　弐挺

一 斧　壱挺　　一 庖丁　四本

一 小刀　三本　　一 剃刀　六本

一 匙　壱ツ　　一 鋏　五本

一 鏡　拾壱面　　一 同鏡　三ツ

一 升量　壱ツ　　一 硯箱　弐組

一 算盤　四面　　一 湯瓶　壱対

一 火箱　壱組　　一 炊道具一切膳椀桶類

一
一 桃燈　貳張
一 茶　拾六袋
一 麦　貳袋
一 粟　三袋
一 和紙　貳拾六貫目
一 昆布　六駄
一 木綿夜着　三ツ
一 同蒲筵　拾貳
一 同綿入　四拾三
一 袷　三十八
一 同単物　拾五
一 同襦袢　六ツ
一 股引　三足
一 同合羽　貳ツ
一 木綿帯　拾五筋
一 足袋　九足
一 絹帯　七筋
一 帷子　三拾九

一
一 絹羽織　貳ツ
一 蛇皮　九張
一 琉球芭蕉布　四百三拾反
一 同木綿　六拾七反
一 同綿　五把
一 同紅花　五斤包
一 同茶碗　九拾五
一 同糖白　九斤
一 同皿　四枚
一 同硯　貳枚
一 同盆　拾
一 同木櫛　拾三枚
一 同筆　十九本
一 同蝋燭　拾挺
一 同竹箸　三拾六枚
一 赤毛氈　壱枚
一 同墨　貳挺
是ハ唐物ニ而商以テ琉球ゟ来申候

一 線香　壱包　一 色唐紙　三帖
一 同薬　弐壺　一 線香　一包
一 唐銭　〆拾貫文　但丁銭
此御品ハ日本船唐出帆之節為代物請取候　中ニ有
池山壱三郎船中泉仲兵衛外人数船頭水主之節
唐国貰物品々之覚
一 木綿唐布　拾五　一 同襦　拾五
右者於定海縣官人ゟ大若干貰申候

一 日本仕立細縫入　拾本　一 帯　拾壱筋
一 足袋　十五足　一 竹籠具　十五
一 木綿唐縞袢　弐ツ　一 布　壱反
一 扇子　拾本　一 紫金錠　九箱
一 草安穀　拾五把　一 織絹　三拾九疋
一 墨　拾六挺　一 筆　大小　弐拾弐本
一 白唐紙　壱帖　一 菓子　三拾六
一 黒塗盆　十壱　一 湯盃　壱ツ
一 焼物小盃　壱ツ　一 菓子入　六ツ

一 蓋茶碗 弐ツ　一 菓子盆 壱枚
一 刻たばこ 十九包　一 烟艸 壱包
一 線香 弐包　一 蚊帳 壱張
一 楊子 六十八　一 湯呑 三ツ
一 きせる 三本　一 同鏡 四ツ
一 現目鏡 壱ツ　一 汁 壱包
一 右之品浦ニ而日本漁商ニ而差遣ス 同人 取計
又支配所ニ而為届人ニ而同外中ニ付差出ス故取計候中ニ付

一 日本…
一 給屋国病死仕候中家仲為下人權右衛門死之
源四郎家持之者ニ付一同持主ニ而差出候
一 脇指 弐腰　一 木綿襦袢 壱ツ
一 同綿入 壱ツ　一 同袷 四ツ
一 同袷羽織 弐ツ　一 同単羽織 壱ツ
一 同単物 壱ツ　一 同帯 弐筋
一 同木綿帯 壱筋　一 帷子 弐ツ
一 蚊屋 壱張　一 硯箱 壱組
一 琉球芭蕉布 七拾反　一 同木綿 三拾八反

一 紅花　弐袋　一 竹絽　三枚
一 同薬　弐袋　一 茶碗　数四拾
一 線香　壱箱　是ハ唐船より被遣候琉球人え被下候
於唐国病死仕候中東伴送之者ニ人積之為候
地より賞物品之覚
一 赤編唐無地　壱疋　一 同縞　壱疋
一 毛帽子　壱ツ
右之足海係官人より大和紅下り候品ニ付

一 日本仕之細編入　壱ツ　一 同羽織　壱ツ
一 皆　壱足　一 足袋　壱足
一 竹袋具　壱
右之品浦ニ而御預ケ日本通商品ニ差出貫申候
右書面之通取改候処相違無御座候ニ付右御請申私
共持参ニ而御預ケ致遂吟味候上一々文面ニ御渡ニ而差出
御渡可知申来候ニ付如此上

一

鴻藏

幸世村

長平次

義右衛門

休次

與惣左衛門

彦左衛門

嘉右衛門

嘉平

安永三甲午年三月十五日

一

御奉行所

次右衛門

與平次

長兵衛

源吉

彦右衛門

徳右衛門

中原仲右衛門

池山善三左衛門

日本政府図書

図書局文庫

右本承[illegible]

寛政二甲寅年三月吉日

御蔵

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

国立公文書館
National Archives of Japan